

中林忠輔先生 ご退職にあたって

加藤 純一

陽光を受けた人影が白銀の上に規則正しく描き出されたシュプールとともにあらわれ近づいてくる。距離はまだある。だが雪を切り刻むシュッシュッという音が耳もとでするようだ。体軸はまったくぶれず、ただ板だけが左右に小刻みにリズムカルに切り出されていく。美しい。機能美とはまさにこのことなんだと肌で感じた瞬間である。

中林忠輔先生は1970年に着任して以来、45年間という長きにわたって本学でご研究・ご教鞭を執られて参りました。そして、2016年3月をもってご退職されることとなりました。グラスを傾けながら昔のことをお話しされる時の先生のお顔はとても生き生きとしていらっしゃいました。ここで簡単ではありますが中林先生をご紹介させていただき、合わせて感謝の意を表したいと思います。

中林先生は東京学芸大学専攻科を修了された後、1970年に立正女子大学の助手に着任し、その後1975年に講師に、校名が文教大学に変更となった後の1985年に助教授、さらに1992年に教授になりました。その間に大学の委員会として入試部、教務部、国際交流部に、教育学部としては学生委員、教育実習委員、入試委員、将来構想委員、教務委員、体育専修主任としてご活躍されました。特に国際交流においてご尽力され、1977年の国際交流友好キャンプ協会によるYosemiteならびに台湾出張を皮切りに、「アメ研」や別科業務など延べ32回もの公務による海外出張をされてきました。

中林先生はご担当の講義の1つである野外活動にも力をいれて学生とともに授業をつくってこられました。初期の頃はスキーやスケート、キャンプ実習、水泳実習など複数の実習がおこなわれていたようですが、近年は尾瀬登山を含むキャンプ実習が野外活動の中心となっていました。幕営指導、キャンプファイヤー指導、調理指導など、このキャンプ実習で野外活動の楽しさを学んだ学生は多数いることと思います。なお、ご退職される年の2月には中林先生が指揮をとる「野外活動Ⅰ」（ウィンタースポーツの実習）がおこなわれる予定です。冬季実習の久しぶりの復活の最初の講義に、先生が最後の指導をされるということになりました。何かの縁を感じるのは私だけでしょうか。

ご専門のバスケットボールでは、授業の他に女子バスケット部の顧問という形で学生と関わりをもっていらっしゃいました。女バスは中林先生だからこそまっているのでは、と思えるほど学生のなかに上手に溶け込んでおり、外からみても羨ましく映ることが多々ありました。年に一度のOG会には中林先生に会いにくる、それも子連れでくる卒業生を多数目にします。「ちゅうさん」と愛称で呼ばれ、この子こんなに大きくなりました、と報告を受けている先生のお顔は満面の笑みいっぱいでした。

中林先生はよく、体育人は研究と実技の両面を実践すべきだよ、と優しくお話しされます。私は正直のところ先生がバスケットをする姿をみたことがありませんでした。ですからどうもこの言葉には今ひとつピンとくるものがなかったのですが、昨年度一緒にスキー場に行った際に先生のウエーデルンの滑走を目にし、「あ、これなんだな」と合点がいました。冒頭の文章はその時の印象をもとに書いたものです。身体が使えるということは我々にとっては非常に重要なのだと改めて認識させられた次第です。

文武不岐、その姿勢を私もまた受け継いでいきたいと考えています。長きにわたり体育専修のためにご尽力いただきましたことに感謝申し上げます。ありがとうございました。

(かとう じゅんいち 文教大学教育学部学校教育課程体育専修主任)